

2019 年度近畿学校保健学会奨励賞 抄録

児童生徒の学校健康診断結果の理解と活用 —小・中・高生に対する予備的質問紙調査の結果より—

○大西瞳¹⁾, 中村襟香¹⁾, 林眞季¹⁾, 岡本希¹⁾, 西岡伸紀¹⁾

1) 兵庫教育大学大学院

キーワード 健診結果 理解 活用 学校

【目的】

健康診断(以下、健診)結果の理解や活用に関する健康教育は、高等学校卒業までに児童生徒の実態に応じて計画的に指導することが望まれる。本研究では健診の理解、結果の活用に関する実態を把握することを目的として、小・中・高生を対象に質問紙調査を行う。本報では予備的調査の結果を報告する。

【方法】

A 府内公立小学校の5年生26名(男子14名, 女子12名), 同中学2年生31名(男子15名, 女子16名), 同高校2年生41名(男子16名, 女子25名)を対象に, 2019年3月に無記名自記式質問紙調査を実施した。質問項目は, 性別, 健診の結果及び目的の理解, 健診による恩恵及び負担(各, 恩恵, 負担)(選択式), 及び恩恵, 負担, 健診結果の活用(自由記述式)とした。

全選択式質問項目間の相関を求め, 相関がみられた項目を6項目(「健康状態の認識」「リスクと対策の必要性の認識」「予防措置の動機」「健診の目的の認識」「恩恵」「負担」)にまとめ, 各合計得点を算出した。各合計得点の校種間差をKruskal-Wallis検定, 性差をMann-WhitneyのU検定, 各合計得点間の関連についてSpearmanの順位相関係数を用いて検討した。自由記述式の回答結果についてはキーワード(以下, KW)を抽出し, 複数の研究者の協力を得てKJ法を参考に分類した。KWの出現頻度の差の検定には χ^2 検定を用い, 調整済み残差によって残差分析を行った。

【結果】

校種別の各合計得点は以下の表のとおりであった。表. 各合計得点の中央値(四分位数)及び校種間差

校種	小学生	中学生	高校生	校種間
n=98(100)*	26(27)	31(32)	41(42)	
健康状態の認識	7.0(6.0, 8.0)	8.0(6.0, 8.0)	8.0(6.0, 8.0)	n.s.
リスクと対策の必要性の認識	11.0(10.0, 11.0)	10.0(9.0, 11.0)	11.0(9.0, 11.0)	n.s.
予防措置の動機	18.0(17.0, 19.0)	17.0(15.0, 19.0)	19.0(17.5, 20.0)	*
健診の目的の認識	16.0(15.0, 17.0)	16.5(13.0, 19.0)	17.0(15.0, 19.0)	n.s.
恩恵	16.5(14.5, 18.5)	18.0(16.0, 19.0)	19.0(17.0, 20.0)	**
負担	7.0(5.0, 8.0)	9.0(8.0, 10.0)	9.0(7.0, 10.0)	**

Kruskal-Wallis検定 * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$ (25%値, 75%値)
※標本数()内は%

各合計得点間の相関を求めた結果, 「恩恵」と「リスクと対策の必要性の認識」「予防措置の動機」との間に相関がみられ($r = .332, .393, p < .01, .01$), 「負担」と「予防措置の動機」との間に負の相関がみられた($r = -.235, p < .05$)。校種間では他に相関はみられなかった。男女別にみると, 女子では「恩恵」と「健診の目的の認識」との間に相関がみられ($r = .346, p < .05$), 男子では「負担」と「リスクと対策の必要性の認識」との間に負の相関がみられた($r = -.317, p < .05$)。

項目間では, 「リスクと対策の必要性の認識」と「予防措置の動機」との間に相関がみられたが($r = .451, p < .01$), 他の項目間に相関はみられなかった。校種別にみたところ, 高校生では「健康状態の認識」と「リスクと対策の必要性の認識」との間に相関がみられた($r = .403, p < .05$)。男女別にみると, 女子では「予防措置の動機」と「健診の目的の認識」との間に相関がみられた($r = .346, p < .05$)。

自由記述のKWの延べ件数は「恩恵」(123件), 「負担」(94件), 「健診結果の活用」(107件)であった。「恩恵」で多かったKWは, 「悪くなる前に見つけられる」(28件), 「健康状態が分かる」(24件)等であった。KW出現頻度の校種間差は「健康であることが知れる」にのみ有意差がみられ, 小学生の件数が多かった($\chi^2 = 7.813, df = 2, p < .05$)。「負担」では「悪かったらと心配になる」(22件), 「面倒」(11件)等があり, 校種間で有意差はみられなかった。「健診結果の活用」では「家族に見せる」(28件), 「自分で見る」(26件)等が見られ, 「今の状態を確認する」(男3件, 女11件)については男女間で有意差がみられた($\chi^2 = 4.434, df = 1, p < .05$)。

【考察】

健康状態の認識は校種が上がるにつれて概ね向上するが, 中学生は健診に対して負担を感じやすく, 健診結果からリスクや対策の必要性の認識, 予防措置の動機を感じる事が小・高生と比べてやや弱いことが示唆された。また, 健診による恩恵や負担は健診結果の理解に一部関連があることが示唆された。

自由記述の項目では, 「負担」として「恥ずかしい」「服を着替える」, 「健診結果の活用」として「家族に見せる」「家族に相談する」等の成人を対象とした健診とは異なった回答がみられた。